

八重山歴史研究會報

第 33 号

編集・発行 八重山歴史研究会
発行日 二〇〇六年四月二二日
事務局 得能(市史編集課) 581-1152
題字 坡名城泰雄氏

【二〇〇六年四月二二日発表要旨】

八重山とフィリピン

考古学上の関係に関する研究

島袋綾野

研究略史

フィリピン起源説と独立発生説

八重山諸島において、シャコガイで作られた貝斧^{かいづ}が報告されたのは、比較的早い時期である。一九六〇年代初めには、大瀨永亘氏が名蔵貝塚から表面採集(以下、表採)した貝斧を、國分直一、金子エリカ両氏に見せている。そして、その貝斧について、フィリピンとの関係をいち早く指摘したのは、R・ピアソン氏であった。一九六九年、ピアソン氏はシャコガイ製貝斧の類例がフィリピンのパラワン島から出土していると報告している。さらに、一九七二年には國分直一氏がパラワン島デュヨン洞穴で出土したものは、先島出土のものと同文化的につながるのでないか、という見解を述べている。R・フォックス氏がパラワン島タボン洞穴群発掘調査報告書

の中で、デュヨン洞穴の貝斧を報告したのが一九七〇年のことであるから、デュヨン洞穴出土の貝斧は、かなり早い段階から、類例として扱われていたことになる。

一九七五年には大瀨永亘氏が名蔵貝塚群第1・第2地点表採の二四個もの貝斧を報告し、その重要性が注目されるようになった。それからは、高山純氏や安里嗣淳氏らの論文が数を増し、シャコガイ製貝斧のフィリピン起源説が定着し始める。しかし、そんな中、一九七八年に、新田重清氏のシャコガイ製貝斧先島独立発生説が発表される。しかし、新田氏の独立発生説は、二〇〇一年に高山氏によって改めて問題提起されるまで、ほとんど顧みられることはなかった。現在でも、貝斧についての諸説は、フィリピン起源説が優勢だと考えて良いだろう。

問題点

現在、先史時代における貝斧の分布は、東南アジア島嶼部と先島諸島、オセアニアのほぼ全域での出土が確認されている。先島諸島では貝斧といえ、すぐにシャコガイ製貝斧を

連想するが、インドネシアやオセアニア地域では、貝種はシヤコガイに限らない。また、先にフィリピン起源説が優勢だと述べたが、その説に問題がないわけではない。高山純氏が指摘した問題は、おおよそ次のとおりである。

1. 安里嗣淳氏も指摘しているが、先島と南部フィリピンとの間にある北部フィリピンや台湾では、シヤコガイ製貝斧の出土が皆無であること。

2. フィリピンで出土する貝斧の時期と先島諸島で出土する時期とに開きがあること。例えば、フィリピンでは約六五〇〇年前との年代が得られているが、先島諸島では約二五〇〇年前までに落ち着いている。

3. 先島の先史文化とフィリピンの先史文化では、「シヤコガイ製貝斧」と「シエルディスク」を除いて、ほとんど共通点がない。つまり、他の南方的要素も望まれる。

4. フィリピンのシヤコガイ製貝斧は土器を供出するが、先島では無土器である。

高山氏は、こういった問題点も先島におけるシヤコガイ製貝斧の独立発生説を考えれば解消するとしている。

しかし、ここで重要なのは、高宮廣衛氏の指摘した無土器文化の二系統説である。高宮氏は、石斧を主体とする文化には貝斧が欠落している可能性があり、貝斧文化が約二五〇〇年前〜一八〇〇年前の間に存在しているのに対して、石斧文化は一八〇〇年前〜八〇〇年前に帰属すると、科学年代測定

の結果と遺物の出土状況を示し、両文化が別系統になる可能性を編年上に示した。無土器期にも先後関係がある、と考えた指摘は、科学年代測定結果を踏まえた上で、高宮氏が石斧の集成を行う中で得た結論であり、たいへん重要である。事実、現在のところ、石斧を主体とする遺跡での貝斧の出土例はあるが、出土数は数点のみである。また、崎枝赤崎貝塚について言えば、貝斧の出土状況は第1層と表面採集であり、石斧や開元通宝が出土した層から確認された資料ではない。そういった点からすると、高宮氏の指摘が妥当なものであり、この先後関係の問題を解決することが、八重山の無土器期の問題を解決する最善の方法であるように思われる。

高宮廣衛氏の編年

高宮氏は、一九九〇年代前半から、積極的に八重山の編年試案に乗り出した。また、あわせて先史時代の有土器と無土器に共通する遺物として、石斧を取り上げ、石斧の形態分類に関する論文を複数発表している。そういった個別の遺物研究に基づき発表されたのが、「八重山諸島の考古編年試案」である。現在まで四回の修正が行われている。以下に、編年の概要と修正点をまとめる。

一九九一年の編年試案

高宮氏は一九九一年に二つの講演会（沖縄・八重山文化研究会、台湾における陳奇祿教授古稀記念講演会）で「八重山地方の考古編年」を発表した（資料1）。時代を「先

資料1 八重山地方の考古編年

歴(原)史時代	川平貝塚文化 <ul style="list-style-type: none"> 後期 { パナリ焼 { 中森式土器 前期 { ビロースク式土器 { 新里村式土器
先史時代	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> ? (仲間第二式土器) 下田原式土器 下田原貝塚文化 (有土器文化) </div> <div style="width: 45%;"> ? 名蔵貝塚文化(貝斧) 仲間貝塚文化(石斧) ? 仲間貝塚文化 (無土器文化) </div> </div>

史時代」と「歴(原)史時代」の2つに分け、先史時代は有土器と無土器、そして歴(原)史時代を前期と後期と区分している。高宮氏は有土器から無土器へとこの変遷について、これまで発表された説を、有土器 無土器 有土器の変遷を是認する説、無土器時代は存在しないとする説、土器を持つ文化と持たない文化が共存したとする説、

共存ではなく入れ替わるとする説の4つに整理した。とは文化一元論、とは文化二(多)元論と呼ばれる。それを踏まえた上で、自らの編年試案については、台湾の先史時代の状況を例に挙げ、「二(多)元説も軽視できないのでは」と述べている。編年で、有土器と無土器が並列関係で示されているのは、そのような考えが反映されているものと考えられる。

一九九四、九六年の編年試案(第二次・三次修正) 高宮氏は一九九四年に「八重山地方新石器無土器期石斧の推移(予察)」の中で、一九九一年の「八重山地方の考

資料2 八重山地方の考古編年

歴(原)史時代	外耳土器文化・・・・・原史・歴史時代文化 (川平貝塚文化)
先史時代	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> 石器文化 (仲間第一貝塚文化) 貝斧文化 (名蔵貝塚文化) </div> <div style="width: 45%;"> ・・・・新石器無土器文化 </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;"> 下田原式土器文化・・・・・新石器有土器文化 (下田原貝塚文化) </div> <div style="width: 45%;"></div> </div>

さらに修正(第三次)した(資料3)。この修正の主な理由は、「第二次修正で無土器文化でも貝斧の文化を古く位置づけているのは、系譜関係の問題を言っているのではなく、系譜関係の有無は今後の課題であるが、誤解を招く配列になっていたから」というものだった。そのため第三次修正では、先史時代有土器と無土器をまた、並列関係で示している。

この編年では、時代区分を大きく先史時代と歴(原)史時代とに分け、先史時代の系統を有土器文化と無土器文化、歴(原)史時代を川平貝塚文化前期(新里村式・ビロース

古編年」を修正(第二次)した(資料2)。この第二次修正では、第一次で石斧文化が貝斧文化の下位に位置付けられていたのを、逆転させている。これは、炭化物による科学年代測定値は、貝斧文化のほうが古いことによる。一九九六年には、「南島考古雑録()」の中で、それを

資料3 八重山地方の考古編年

歴(原)史時代	川平貝塚文化 <ul style="list-style-type: none"> 後期 { パナリ焼 中森式土器 前期 { ピロースク式土器 新里村式土器
先史時代	仲間第一貝塚文化(石斧) 名蔵貝塚文化(貝斧) ? (仲間第二式土器) 下田原式土器 下田原貝塚文化 (有土器文化)

ク式・中森式)・後期(パナリ焼)に区分している。二〇〇〇年の編年試案(第四次修正)高宮氏は二〇〇〇年に「南島の先史世界」の中で、一九九六年の編年を(A)、さらに修正した編年(資料4)を(B)として「八重山諸島の考古編年試案」を発表した。第四次修正では、第三次修正で有土器と無土器を並列した試案だったのに

対し、貝斧文化と石斧文化は別系統として考えた方がよいとして、有土器 無土器の流れを支持し、圏外に貝斧文化を位置づけている。無土器のひとつの特徴として捉えられていた貝斧の文化を無土器の中でも特異なものと位置づけた編年は他になく、この編年の特筆すべき点である。高宮氏の編年の特徴をまとめると、これまで八重山先史時代のひとつの特徴として扱われてきた「無土器文化」という問題と「貝斧」の問題を切り離して考えている点である。つまり、無土器文化の特徴として「貝斧」があるのではなく、「無土器文化」の中にも、「貝斧が出土する少数の遺跡」と

資料4 八重山諸島の考古編年試案

歴(原)史時代	川平貝塚文化 <ul style="list-style-type: none"> 後期 { パナリ焼 中森式土器 前期 { ピロースク式土器 新里村式土器
先史時代	無土器文化 石器文化(仲間第一貝塚文化) ↑ 貝斧文化(名蔵貝塚文化) ↑ 有土器文化 下田原式土器文化

「石斧が出土する遺跡」があり、貝斧が出土する例は、八重山の先史時代の系譜関係の直線上には並ばないという指摘である。さらに、貝斧文化は石斧文化に先行する、と考えている。これは、高宮氏が精力的に行ってきた八重山先史時代の石斧の研究に由来する。高宮氏は石斧の中でも形態的に特徴のある「八重山型石斧」の存在を提示した。それは、

先史時代における有土器・無土器両時期に共通して現れるものである。そのため、石器文化に関しては、有土器と無土器は文化的に連係しているのでは、と考えている。高宮氏が指摘した先史時代有土器と無土器との文化的連係の有無については、今後の新たな資料の出土を待たなくてはならないが、いずれにしても、この貝斧文化の存在を考古編年上で明確にすることが、八重山先史時代のルーツ解明の一端を担っていることには間違いない。そのためにも、フィリピン考古学と八重山諸島の考古学は連携をはかり、共同研究を進めていくことが重要である。